

法然上人における「苦」について

— 抜苦与樂を中心に —

令和3年1月29日13:30～14:30 オンライン
大正大学教授 林田康順

【講義概要】法然上人は、どのように「苦」を受けとめ、そこからの解放を説いておられたのだろうか。法然上人のご遺文に見られる用法を通じて明らかにしたい。具体的には、①各種法語に用いられる「苦」の分析を施し、②次に法然上人が説示された「苦」の解決策として、阿弥陀仏による「抜苦与樂—慈悲—」の用法（『無量寿経釈』等）の意義を明らかにし、③さらに、そうした「抜苦与樂—慈悲—」の実践について私達がいかに捉えるべきなのかについて考察したい。

【一】はじめに—仏教における「苦」の捉え方—

- 1 釈尊出家の動機—四門出遊の逸話⇒老・病・死等の苦の克服を目指す
- 2 四苦八苦—生苦・老苦・病苦・死苦・愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五陰盛苦
- 3 三苦—苦苦（肉体的苦）・壊苦（精神的苦）・行苦（無常を感じる、一切皆苦）
- 4 四諦—苦諦・苦集諦・苦集滅諦・苦集滅道諦⇒八正道の実践

【小結】一切衆生が苦しみからの解脱を果たすことこそ、釈尊出世の本懐に他ならない。

【二】法然上人のご法語に見られる「苦」について

— 1 四苦八苦等

①すべていとうべきは六道生死のさかい、ねごうべきは浄土菩提なり。天上にうまれてたのしみにはほこるといへども、五衰退没のくるしみあり、人間にうまれて国王の身をうけて、一四天下をばしたごうといへども、生老病死・愛別離苦・怨憎会苦の一事もまぬがる事なし。これらの苦なからんすら、三悪道にかえるおそれあり、こころあらん人は、いかがいとわざるべき。うけがたき人界の生をうけて、あいがたき仏教にあい、このたび出離をもとめさせたまえ。【要義問答・昭法全六一三】
→愛別離苦・怨憎会苦・これらの苦＝四苦八苦
→出離をもとめさせたまえ

②心中には往生の心ざし片時もわすれがたく、身口の二業を意業にゆずり、世路のいとなみを往生の資糧とあてがい、妻子眷属を知識同行とたのみて、よわいの日々にかたぶくをば、往生のようやくちかづくぞとよるこび、命の夜々におとろうるをば、穢土のようやくとおざかると心え、命のおわらん時を生死のおわりとあてがい、かたちをすてん時を苦悩のおわりと期し、影響を紫のとぼそにたれ、行者はこの時ゆかんと期して結跏を観音の蓮台の上につ。【配流より上洛の後示されける御詞・昭法全四七八】

→苦悩のおわり＝死苦（四苦八苦のおわり）
→この時ゆかんと期して、結跏を観音の蓮台の上につ

③本願信じて往生ねがい候わん行者も、この苦はのがれずとて、悶絶し候とも、息のたえん時は、阿弥陀ほとけの力にて、正念になりて往生をし候べし。臨終は髪筋きるほどの事にて候えば、よそにて凡夫さだめがたく候。ただ仏と行者との心にて知るべく候なり。

【往生浄土用心・昭法全五六三】

→この苦＝死苦（臨終時の苦しみ≡髪筋きるほど）
→阿弥陀ほとけの力にて、正念になりて往生をし候べし

一 二 三界六道における苦しみ→生死輪廻する苦しみ

①あるいは人の苦にあうを見て、三途の苦をおもいやれ、あるいは人のしぬるを見て、無常のこわりをさとれ、あるいは、つねに念仏してその心をはげませ、あるいはつねによきともにあいて、心をはじめられよ。【十二箇條の問答・昭法全六七九】

→人の苦→三途の苦、四苦八苦→娑婆において受ける苦しみ
→念仏してその心をはげませ

②なき人のために念仏を廻向し候えば、阿弥陀ほとけひかりをはなちて、地獄餓鬼畜生をてらし給い候えば、この三悪道にしづみて苦を受くる者、そのくるしみやすまりて、いのち終りてのち、解脱すべきにて候。大経にいわく、若し三塗勤苦の処に在りて、此の光明を見たとまつれば、皆休息を得て復た苦悩無し、寿終の後皆解脱を蒙る。【往生浄土用心・昭法全五六〇】

→苦＝三悪道において受ける苦しみ
→此の光明を見たとまつれば、苦悩無し

③おおよそ念仏を謗するものは、地獄におちて五劫苦をうくることきわまりなし。念仏を信ずるものは、浄土に生まれて無量楽をうくることきわまりなし。【大胡の太郎実秀が妻室のもとへつかはす御返事・昭法全五一三】

→五劫苦＝地獄において受ける苦しみ
→念仏を信ずるものは、浄土に生まれて無量楽をうくる

④念仏は本願なり。十方三世の仏菩薩にすてられたるえせ者をたすけんとして、五劫まで思惟し、六道の苦機にゆずり、これをたよりにてすくわんと支度し給える本願の名号なり。

【東大寺十問答・昭法全六四四】

→六道の苦機＝六道において受ける苦しみ（輪廻する苦しみ）
→すくわんと支度し給える本願の名号なり

⑤貪瞋煩惱の敵にしばられて、三界の樊籠にこめられたるわれらを、弥陀悲母の御心ざしふかくして、名号の利剣をもちて生死のきづなを切り、本願の要船を苦海の波にうかべて、かの岸につけ給うべしと思ひ候わんうれしきは、歡喜の涙たもとをしぼり、渴仰のおもい肝に染むべきにて候。【往生浄土用心・昭法全五六一】

→苦海の波＝三界に輪廻する苦しみ
→名号の利剣をもちて生死のきづなを切り

⑥聖道の諸宗は理ふかく解微にして証を得ること甚難し。此則世くだり人愚にして機教相違すれば其の修行に堪えず。ながく苦海に沈淪していまだ涅槃の岸に到らず。浄土の一門は解し易く、行じ易ければ得脱最速なり。【大原問答時説法の御詞・昭法全四七四】

→苦海＝三界に輪廻する苦しみ

→浄土の一門は解し易く、行じ易ければ得脱最速なり

⑦つねに上人に御対面ありて、底下の凡夫開悟得脱の要義を談ぜられけるに、上人諸宗の大綱をあげて、一々の義理をつくさるるに、みなこれ上代上機のためのおしえにして、末代下根のたぐいをよびがたし。浄土の宗旨称名の本願のみぞ、苦海の船師愛河の橋梁にて、愚鈍下智の当機にあいかなえるとて、聖道浄土の奥義をのべられける。【慈鎮和尚との対話・昭法全七三一】

→苦海＝三界に輪廻する苦しみ

→浄土の宗旨称名の本願のみぞ…愚鈍下智の当機にあいかなえる

— 3 行—聖道門における難行苦行、衆生救済を目的とした苦行—

①濁世の衆生、自力をはげまんには、百千億劫難行苦行をいたすというとも、そのつとめおよぶところにあらず。またかの聖道門は、よく清浄にして、そのうつわものにたれらん人の、つとむべき行なり。懈怠不信にしては、中中行ぜざらんよりも、罪業の因とるかたもありぬべし。【念仏大意・昭法全四一三】

→苦行＝聖道門の行を修める苦しみ、難行苦行の意⇒自力による苦からの解放は不可能

→自力聖道門⇒他力浄土門

②われ別願をもて浄土に居して、薄地底下の衆生を引導すべし、その衆生の業力によりて、生るるといふはかたかるべし。われすべからく衆生のために永劫の修行をおくり、僧祇の苦行をめぐらして万行万善の果徳円満し、自覚覚他の覚行窮満して、その成就せんところの、万徳無漏の一切の功德をもて、われ名号として、衆生にとなえしめん。【登山状・昭法全四二七】

→苦行＝法蔵菩薩による兆載永劫の修行、衆生救済を目的とした苦行

→われ別願をもて浄土に居して、薄地底下の衆生を引導すべし

③悪道に堕ちて万の苦をうけんよりは、やすき念仏を申して楽を得べき物なり。【女人往生の旨を尼女房に示されける御詞・昭法全七〇七】

→万の苦＝悪道において受ける苦しみ、抜苦与楽

→やすき念仏を申して楽を得べき物なり

〔小結〕法然上人は、衆生が蒙るさまざまな「苦」の克服として、浄土門への帰入・本願念仏の相続を強く促していることが分かる。

【三】阿弥陀仏による抜苦与楽—慈悲の体現として—

— 1 『無量寿経釈』における抜苦与楽

①抜苦与楽—衆生に楽を与える慈（Smaitrī）と衆生の苦を抜く悲（Skaruṇā）の実践。

②東大寺講説『無量寿経釈』（法然上人58歳、文治6（1190）年）

【総】諸仏の心＝平等の慈悲を体とする

【別】阿弥陀仏の四十八願＝抜苦与楽＝大慈悲

「抑も此の四十八願は、皆、抜苦与楽の義あり。爾る故は、大悲とは抜苦なり、大慈とは与楽なり。

第一の無三悪趣は大悲抜苦なり。第二の不更悪趣は亦是れ大悲抜苦なり。

第三の悉皆金色は是れ与楽なり。第四の無有好醜は又是れ与楽なり。

乃至十八念仏往生願に二意あり。出離生死は是れ抜苦なり。往生極楽は是れ与楽なり。

生死の衆苦、一時に能く離れ、浄土の諸楽、一念に能く受く。若し弥陀に念仏の願なく、衆生、此の願力に乗ぜずんば、五苦衆生に逼迫し、云何が苦界を離るべし。過去生生世世に弥陀の誓願に値わず、今に三界皆苦の火宅に在り、未だ四徳常楽の宝の城に至らず。過去、皆以て此くの如し、未来、亦空しく送るべし。今生に何れの福ありてか、この大願に値えり。設し遇うといえども、若し信ぜずんば、値わざるが如し。既に深く之を信じ、今、正に是に値う。但し設し心に之を信ずといえども、若し之を行ぜずんば、又信ぜざるが如し。既に之を行じ、正に是を信ず。願力空しからず、行業誠あり、往生に疑なし。既に生死を離れ、衆苦を離るべし。即ちこれ大悲抜苦なり。

次に極楽に往生して後、身心に諸楽を受く。眼に如来を拝見し、聖衆を瞻仰す。見る毎に眼根の楽を増す。耳に深妙の法を聞く。聞く毎に耳根の楽を増す。鼻に功德の法香を聞く、聞く毎に鼻根の楽を増す。舌に法喜禅悦の味を嘗める。嘗める毎に舌根の楽を増す。身に弥陀の光明を蒙る。触るる毎に身根の楽を増す。意に楽の境を縁ず。縁ずる毎に意根の楽を増す。極楽世界の一々の境界は、皆、離苦得楽の計なり。（中略）これ則ち弥陀如来の慈悲の御心、念仏の誓願を発して、我等衆生に苦を抜き楽を与える心なり。」（昭法全七一～七八）

* 四十八願と抜苦与楽との関係

願数	願名	抜苦	与楽
第一	無三悪趣願	大悲抜苦	記載なし
第二	不更悪趣願	大悲抜苦	記載なし
第三	悉皆金色願	記載なし	与楽
第四	無有好醜願	記載なし	与楽
第十八	念仏往生願	出離生死是抜苦	往生極楽是与楽

③『選択集』における「選択」思想への昇華（法然上人66歳、建久九（1198）年）

* 『選択集』第三章段「然れば則ち、弥陀如来、法蔵比丘の昔、平等の慈悲に催されて、普く一切を撰せんがために造像起塔等の諸行を以て往生の本願と為したまわず、唯称名念仏の一行を以て、その本願と為したもう。」（聖典三・二六）

〔小結〕『無量寿経釈』において法然上人は、苦の世界から出離すること、浄土往生を遂げることこそ、抜苦与楽であり、阿弥陀仏の念仏往生願は、抜苦与楽を叶える誓願であると指摘されている。

なお、『無量寿経釈』において法然上人が言及している四十八願の選定、とりわけ、念仏往生願の選定をめぐる「**抜苦与楽**」に基づく一連の説示は、称名念仏を修めた結果としてもたらされるものであり、法蔵菩薩がお念仏を本願往生行として選定された理由とはなっていない。そうしたことから法然上人は、自身の思索と宗教体験を深められた結果、『選択集』において、念仏・諸行の取捨という選択思想を開顕されることとなる。

いずれにしても、『無量寿経釈』『選択集』において明らかにされている法蔵菩薩による四十八願の建立、ないし、第十八念仏往生願選択の底意に貫かれている思いこそ、阿弥陀仏による**抜苦与楽**（平等の大慈悲）の実現に他ならない。

— 2 余仏の慈悲にすぐれたまへり—凡入報土の成立—

①『四箇条問答』「阿弥陀仏ノ御慈悲ハ、余仏ノ慈悲ニスグレタマヘリ。ソノ故ハ、コノ常没ノ衆生ヲ十声一声ノ称名ノ功カヲ以テ、無漏ノ報土ヘ生ゼシメムト云、御願ニヨテ也。阿弥陀仏ノ名号ノ余仏ノ名号ニスグレタマヘルト云モ、因位ノ本願ニタテタマヘル名号ナルガユヘニ勝レタマヘリ。シカラズバ、報土ノ生因トナルベカラズ。余仏ノ名号ニ同ズベシ。」（昭法全六九九）

〔小結〕法然上人は、本願念仏による凡入報土の成就の中に、阿弥陀仏の大慈悲（**抜苦与楽**）の超勝性を見出されている。

— 3 慈悲をもてくわえたすけて—正念来迎から来迎正念へ—

①死苦（臨終時の**苦**しみ）

臨終時の凡夫の心—三種の愛心（境界愛・自体愛・当生愛）

②『大胡の太郎実秀へつかはす御返事』「仏ノ来迎シタマフ事ハ、モトヨリ行者ノ臨終正念ノタメニテ候ナリ。ソレヲココロエヌ人ハ、ミナワガ臨終正念ニテ念仏タラムオリニ、仏ハムカヘタマフベキトノミココロエテ候ハ、仏ノ願ヲモ信ゼズ、経ノ文オモココロエヌテ候ナリ。称讃浄土経ニハ、慈悲ヲモテクワエタスケテ、ココロヲシテミダラシメタマハズトトカレテ候也。タダノ時ニ、ヨクヨク申オキタル念仏ニヨリテ、臨終ニカナラズ仏来迎シタマフ。仏ノキタリ現ジタマヘルヲミタテマツリテ、正念ニハ住スト申シツタエテ候ナリ。」（昭法全五二一）

〔小結〕法然上人は、阿弥陀仏の来迎によって、人々の三愛や死**苦**が軽減して正念を得、浄土往生が叶えられ、これは阿弥陀仏による慈悲（**抜苦与楽**）の実践に他ならないとする。

【四】おわりに—慈悲の選捨・慈悲の実践—

— 1 慈悲を助にささぬ—ひとりだちの念仏—（仏辺）

①『禅勝房伝説の詞』「本願の念仏には、ひとりだちをせさせて助をささぬ也。助さす程の人は、極楽の辺地にむまる。助と申すは、智慧をも助にさし、持戒をも助にさし、道心をも助にさし、慈悲をも助にさす也。」（昭法全四六二）

〔小結〕法然上人によれば、慈悲（**抜苦与楽**）の実践を浄土往生の条件として選定されなかったのは、凡夫（機辺）の側ではなく、極楽浄土に厳としてましまし、常に私たちのことを憐愍し、救いの手を差し伸べようとしておられる阿弥陀仏自身（仏辺）の側である

(選捨)。それは、阿弥陀仏にとって、現実の人間の姿(信機)を見据えた上でのやむを得ぬ決断であり、しかも、すべての者を往生させるためのもっとも賢明なご判断だったのである。

— 2 行ずべき慈悲—父母の心と重ねて— (機辺)

①『念仏往生義』「念仏して往生するに不足なしといひて、悪業をもはばからず、行ずべき慈悲をも行ぜず、念仏をもはげまざらん事は、仏教のおきてに相違するなり。たとへば父母の慈悲は、よき子をも、あしき子をもはぐくめども、よき子をばよろこび、あしき子をばなげくがごとし。仏は一切衆生をあはれみて、よきをも、あしきをもわたし給へども、善人を見てはよろこび、悪人を見てはかなしみ給へるなり。よき地によき種をまかんがごとし、かまへて善人にしてしかも念仏をも修すべし。これを真実に仏教にしたがふ者といふ也り。」(昭法全六九一)

〔小結〕私達凡夫にとって「**抜苦与楽**を体とする大慈悲を満足に修められない」という信機の自覚は不可欠である。しかし、「慈悲(**抜苦与楽**)を行じられる・行じられない」という判断を最終的に下されるのは阿弥陀仏(仏辺)に他ならない。したがって、そうした阿弥陀仏による判断と、仏教徒として私達が「行ずべき慈悲(**抜苦与楽**)」を「行じようとする・行じようとしなない」という姿勢を混同することは許されないだろう。

阿弥陀仏は、わが父母のごとく、平等の大慈悲をもって、分け隔てなく誰しをもしっかりと抱きすくめ、決して離すまいとされる。お念仏の相続を通じて私達は、そうした阿弥陀仏の大慈悲を受けとめられたならば、自身のありさまを見つめ直さずにはいられなくなり、その思いは、阿弥陀仏に喜ばれる慈悲(**抜苦与楽**)の実践を心掛けた日暮らしへと結実するのである。

— 3 慈悲をおこして—還相回向の実践— (機辺)

①『津戸の三郎へつかはす御返事(九月十八日付)』「カカル不信ノ衆生ノタメニ、慈悲ヲオコシテ、利益セムトオモフニツケテモ、トク極楽ヘマイリテ、サトリヒラキテ、生死ニカヘリテ、誹謗不信ノモノヲワタシテ、一切衆生アマネク利益セムトオモフベキ事ニテ候也。」(昭法全五〇三)

〔小結〕法然上人によれば、一切衆生を浄土へ迎え導く還相回向は、私達自身による慈悲(**抜苦与楽**)の実践に他ならない。

※本講において取り上げた法然上人による種々の法語は、法然上人ご自身による尊き仏道実践と甚深なる宗教体験抜きでは成立しない。阿弥陀仏の大慈悲を汲み取って語られた一連の法語は、私達に向けて残して下さった法然上人による**抜苦与楽**(慈悲)の働きとして受けとめるべきであろう。

*ご清聴ありがとうございました。

今後とも法然上人の御教えを共々にお伝えして参りましょう。

合掌